
所 報

1. 研究所活動報告

1. 研究所主催講演会

1980年度は次の講演会を開催した。

1980年10月3日 渡辺正雄教授（新潟大学，本学非常勤講師）：

これからの自然科学教育

2. 研究会

1980年度秋学期以降に開催した研究会は次の通りである。

③ 11月13日，林昭道講師：ゲートにおける「自己活動」について

④ 12月15日，向井敦子助手：心理学的行動座標の仮説的構成の試み

④ 2月19日，高橋浩助手：ボルノー「希望の哲学」の端緒

3. 研究助成金

本研究所のプロジェクト「大学入試における学力テストと能力テストの比較研究」に対して私学振興財団から学術研究振興資金として，1980年度140万円，1981年度160万円の交付を受けた。

同研究プロジェクトは，(1)本学で過去20年以上にわたって入学者選抜のために用いてきた学習能力テストの妥当性を検討すること，(2)それらの評価項目と評価基準を見直して新たに設定すること，(3)従来の方法では評価が困難な能力・特性を多角的に評価できる新しい形式・内容のテストを開発すること，(4)各種テスト結果のコンピューターによる集計方法が入学者選抜に対してもつ功罪の検討を行うことを目的としている。上記の4課題の各々について以下の4研究班が組織され，各研究班ごとに課題と取組みながら，他の研究班との協議・討論を行い，研究全体の計画達成を期している。

第1班：分担課題「領域別テストの妥当性の検討」 原一雄（主査），原喜美，石川光男，石本菅生，川瀬謙一郎，J・エドワード・キダー，リチャード・リンディ，三宅彰

第2班：分担課題「領域別評価と基準の検討および新しい設定」 星野命（主査），阿久津喜弘，ベン・C・デューク，原喜美，勝見允行，川瀬謙一郎，J・エドワード・キダー，小林栄智，リチャード・リンディ，三宅彰，中野照海，讃岐和家，ラ

ンドルフ・H・スラッシャー

第3班：分担課題「創造性などの新形式・内容をもった能力テストの開発」石川光男（主査），小林栄智，中野照海，ランドルフ・H・スラッシャー

第4班：分担課題「大学入試へのコンピューター導入の功罪の検討」石本菅生（主査），阿久津喜弘，勝見允行，野崎昭弘

同プロジェクト研究会議は1980年4月22日，同6月24日，1981年3月13日に開催された。

1 研究室活動報告

A 教育哲学研究室

a. 教育哲学

教育哲学研究室の1980年度の活動は前年にひきつづき各メンバーの個別的研究を中心としている。本年度は讃岐和家教授が9月1日より一年間の研究休暇をとったほかは大きな変化はない。

金子武蔵客員教授

本年度の演習題目は「イエナ時代のヘーゲル」であった。

川瀬謙一郎教授

I 研究活動

- 1 エートス論を中心として M・ウェーバーの宗教社会学の研究を継続して行っている。
- 2 和辻哲郎における共同体論の研究を継続

II その他

東京地区私立大学教職課程研究協議会の加盟校としてのICUを代表して，教職課程の改善についての研究委員会に参加している。

讃岐和家教授

I 研究活動

- 1 1980年9月1日から81年8月31日までの間，研究休暇を与えられ，前年度に引き続いて，ジョン・デューイの教育哲学の研究を行なった。この研究との関連において，1980年7月25日から8月24日までアメリカ合衆国に出張し，南イリノイ大学のデューイ研究センター，コロンビア大学，ヴァーモント大学，シカゴ大学その他を訪問し，文献の調査を行なった。

これと平行して，キリスト教に基づく教育哲学，教員養成問題，および大学にお

ける一般教育の研究を行なった。

2 下記の共同研究プロジェクトに研究分担者として参加した。

- (1) 「私立大学における教員養成の総合的研究」(1980年度, 研究代表者は早稲田大学の鈴木慎一教授)
- (2) 「教職導入教育の実験的研究」(1981年度, 研究代表者は上記と同じ)

II 学会発表等

- 1 1980年9月26, 27日, 教育哲学会第23回大会(東京女子大学で開催)に参加し, 第2日目の一般研究第2室の司会を行なった。
- 2 1981年6月13, 14日, 一般教育学会第3回大会(日本大学法学部で開催)に参加し, 第1日目の「人文部門」研究発表及び討議の司会を行なった。

III 論文

- 1 「アメリカにおける伝統主義の教育哲学」国際基督教大学学報 I-A 『教育研究』23, 1980年, pp. 1-19.
- 2 「学校における知育と徳育」, 『道德と教育』, No. 225, 1981年3・4月合併号, pp. 4-8.

IV その他

- 1 一般教育学会 学会誌編集委員会委員, 第3回大会実行委員会委員
- 2 文部省 一般教育視学委員会委員
- 3 三鷹市 社会教育委員会委員
- 4 キリスト教学校教育同盟 キリスト教学校教師養成事業委員会, および同委員会研究セミナー担当委員
- 5 1981年7月2日, 東北学院大学一般教育研究所主催の講演会において, 「最近のアメリカにおける一般教育の動向」と題する講演を行なった。

立川 明教授

I 研究活動

19世紀アメリカ大学の歴史について, またヨーロッパ中世の大学の誕生の知的背景について研究をすすめている。もう1つの関心領域は授業研究で, 特に国語と英語のいくつかの授業を「展開」の角度から分析しており, 近い将来まとめて発表の予定。

II 学会活動

1980年11月28日~30日 大学史研究会年次セミナー(於 奈良)に参加, 「中世大学の起源の知的背景」を研究発表し, また「19世紀アメリカ大学に於ける保守と革新」と題する提案をシンポジウムで行なった。

III 著作

1. 「アメリカ中等教育地理の衰退: 1982-1910」『教育研究』23(1980),

pp. 35—56.

2. 「19世紀アメリカの大学と科学：ニュー・イングランドのディレンマとロウレンス科学学校の開設」『大学史研究』2（1981）， pp. 22—33.
3. 「教養教育と教育実習」 関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会 小規模大学部会 『研究部報告』 2（1981）， pp. 1—13.

林 昭道講師

I 研究活動

ゲーテ，シュプランガー等の著作を検討し，教育の諸概念の成立を追う。

II 学会活動

1980年10月15，16日 教育史学会第24回大会（於東京学芸大学）に参加。

1981年7月18日 世界教育史研究会第1回（於東京学芸大学）に参加。

b. 教育思想史

長 清子教授

I 研究活動

1. 個人研究として

a 近代日本における天皇制の研究

b 近代日本人の歴史観の研究

c 日本思想史における価値観の変容（非連続）と連続の問題——日本文化のアーキタイプスをめぐって——

2. アジア文化研究所の同僚との共同研究

a アジア諸国における宗教，価値観と近代化の問題

b アジアにおけるキリスト教比較年表の作成——西洋諸国からの“Westernizationの波”，諸教会よりの“Christianizationの波”，及び，日本，中国，朝鮮，フィリピン，インドネシア，インド等における“内発的なModernizationの波”等の相互インパクトの展開を1800年～1945年にわたってたどる。

II 学会活動

1. 教育哲学会 第23回全国大会（1980年9月26日～28日，於東京女子大学）におけるシンポジウム「教育思想の比較文化的考察」に発題者として参加。
2. 東北大学文学部における「近代日本思想史」の集中講義（1980年9月6日～11日）のため仙台に出講。
3. 国際交流基金（Japan Foundation）の要請により北京語言学院に開設された中国諸大学の教員のための日本語研修センター（日本の外務省，及，中国の教育部共同事業）に於て「近代日本思想史」の連続講義のため，1980年11月25日～12月

24日の期間、中国を訪問。その間、北京大学、北京社会科学院、世界宗教研究所、南京大学宗教研究センター、南京(金陵)神学院等を訪問、大学教授、研究所関係の学者、及び、キリスト教会指導者らと意見の交換をした。また、北京において「日本人の思考様式と近代化——伝統の連続と非連続——」のテーマで公開講演を行った。

4. 婦選会館社会思想史講座において、「日本思想史にみる婦人解放」のテーマで、1981年5月—7月の期間、5回(土曜日)にわたり連続講義を行う。
5. 群馬県史編纂委員会の依頼により「教育文化編」の専門委員(東京大学経済学部石井寛治教授と共に)として1981年4月より月一回前橋における研究会に出席。
6. NHKテレビ放送「近代日本の求道者—井口喜源治—研成義塾の人間教育」(対談) 1981年6月21日放送。
7. 講演(英語)“Japan’s Indigenous Culture and Modernization” をアジア経済研究所に於て行う。1981年7月14日。

8.

教育哲学会理事、同編集委員

日本イギリス哲学会 理事

国際文化会館評議員、日米知的交流委員会委員

UBCHEA評議員等。

III 著 作(叢書・論文)

1. 「日本人の天皇観」『沖繩』日本平和学会編、早稲田大学出版部、1980年7月10日、pp. 143—157, 補足 pp. 166—167。
2. 「思想史的に見た昭和期の学院——一学生としての体験から——」『神戸女学院百年史各論』神戸女学院、1981年3月12日、pp. 373—396。
3. “Japanese Views of Modernization of Asia” *Asian Cultural Studies*, No. 12, March 1981, pp. 79—88.
4. “The Continuity of Old Symbols and the Innovation of Traditional Value Systems in Modern Asia” *Asian Cultural Studies*, No. 12, March 1981, pp. 89—106.
5. 『日本人の自伝』第3巻『内村鑑三、新島襄、木下尚江』「解説」平凡社、1981年5月8日、pp. 371—385。
6. 「教育思想の比較文化的考察——比較の指標・基礎文化」『教育哲学研究』第43号、教育哲学会、1981年5月10日、pp. 19—24。

他にエッセイ

1. 「中国のキリスト者」『毎日新聞』1981年3月4日
2. 「四人組裁判渦中の中国をみて——信教・思想の自由化をめぐって——」『婦人公論』中央公論社、1981年3月号。等。

c 比較教育学

B. C. Duke 教授

I 研究活動

- (1) Education in Developing Nations : Trilingualism in Malaysia, Field Study, Kuala Lumpur & Ipoh, Malaysia.
- (2) Great Educators From East Asia : Japan, Philippines, Thailand and Indonesia, and Malaysia (Research Grant from Nihon Shinkokai)
- (3) A Documentary History of Postwar Independent Japan.

村瀬良子 (教育哲学・非常勤助手)

I 研究活動

1. 野口晴哉の思想を研究対象として分析する方法を模索中
2. フレイレ研究の一環として *Extension or Communication* の翻訳 (亜紀書房・AALA 叢書として近々出版予定)
3. 林竹二研究
4. 整体法の研究と実践

高橋浩助手

I 研究活動

- 1) ボルノーの「希望の哲学」の内容と、現代における教育人間学の可能性を検討。
- 2) ICU金子武蔵講義録編集委員会の編集会議を定期的開催。

山口和孝助手

I 学会発表

1980年10月21日, 日本宗教学会第39回学術大会 (国立教育会館) において, 「教育基本法に違反する宗教教育の事例」を発表。

II 論文

「教育基本法九条と宗教教育導入の問題」『教育』 No. 390 国土社 1980. 11,

III その他活動

- 1) 1980年8月1日, 第3回教育セミナー (ICU図書館) 主催。
- 2) 1981年8月3日, 第4回教育セミナー (ICU本部棟) 主催。

B 教育社会学研究室

- 1) 社会調査の実習は, 従来, 東北地方, 新潟県における米作農家を対象に行なってきたが, 本年度から静岡県下の茶栽培農家の実態について, 研究することとな

った。教育社会学専修の学生達は、社会学専修学生とともに、1980年8月下旬、8日間の合宿生活を行なって、主として茶栽培農家における両親の子供に対する教育志向、教育期待について、面接による質的調査を行った。変動社会における、子供の教育、将来の職業についての見通しの難しさを痛感した。

- 2) 前々年度に引きつづき、フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学との共同研究「繊維産業に従事する婦人労働者について」(国際交流基金の援助による)は最終段階を迎え、本年度は、年少労働者について、昼間定時制高校に学びながら、繊維産業に働く女子生徒について研究を行なった。静岡県浜松市城南高等学校の先生方や生徒の皆さんのご協力に深く感謝する。現在最終レポート作成中である。この間、アテネオ・デ・マニラ大学から日本へ2人の研究者を迎え、また私自身渡比して、彼の地のFILSYN繊維会社について詳細に学ぶ機会を与えられた。

原 喜 美

インドネシア・パジャジャラン大学客員教授 (バンドンにて)

原 喜美教授

研 究 活 動

共著 (編)

- 1) 門脇厚司・原喜美・山村賢明編

現代のエスプリ別冊 『変動社会と教育』 至文堂 1980年

- 2) 青井和夫監修 / 湯沢雍彦編集

原 喜美著「アジアにおける家族問題」—フィリピンを中心にして—『家族問題の社会学』サイエンス社 1981年

論文・レポート

- 1) *Community Development Programs in Japan*. ACUCA (Association of Christian Universities and Colleges in Asia) November 1980.

- 2) *Research on the Status of Women, Development and Population Trends in Asia with an Annotated Bibliography*. Paris, UNESCO. November. 1980.

- 3) *Women Workers in Textile and Electronics and Electric Machinery Industries in Japan*. Paris. UNESCO. November 1980.

- 4) 「フィリピンにおける教育」『世界教育事典』ぎょうせい 1980年

- 5) 「フィリピンにおける授業内容の改革」『授業改革事典』第一法規 1980年
諸活動 (学会・大会など)

- 1) 「フィリピンにおける学卒者の雇用状況」国立教育研究所研究会 1980年

- 2) 「フィリピンにおける現職教育について」国立教育研究所文部省科研費による研究報告 1981年

- 3) 大分県社会教育振興大会基調講演「アジア諸国からみた日本のイメージ」1980

年12月

- 4) 放送教育センター研究会（委員長 藤田健治氏）『女性の社会的 文化的側面に関する研究』 「アジアにおける女性の役割」 1980年12月
- 5) ICU 社会科学研究所「平等・発展・平和」を目指して 1981年 2月

C 心理学研究室

恒例の心理学サマー・セミナーが7月13日より16日まで 八王子の大学セミナー・ハウスで開かれ、学部学生・大学院学生あわせて66名と教育職員4名が参加した。テーマごとに分団に分れての学習と親睦・レクリエーションを兼ねた行事を泊り込みで行なった。

第3学期の心理学コロキウムを12月16日に催した。アメリカワシントン州立大学の赤嶺利男博士に「アメリカにおける教育測定と評価」について講演していただいたのち、活潑な討議が行われた。出席者25約名。

年が改まったのち2月21日に教育学科心理学専修生の卒業論文発表会を行なった。全部で24の卒業発表があり、同輩・教員の質疑応答がそれぞれの発表に続いた。なお、実さいに4月に卒業した者の数は、22名であった。また、修士論文を提出し学位を認められた者は5名であった。

学年度が変わり、第1学期に入って、5月10日（日）本研究室の協力で人間主義心理学会の第4回研究集会が教育研究棟2階の集会室を主会場に開催された。星野教授が準備委員長となり、原教授・向井助手・大学院生数名が運営に当たった。本学元大学院教授の依田新先生も参加された。参加者は会員11名、学生7名で、宿題報告「人間主義心理学と学校教育」上田吉一氏、特別講演「心理学における人間中心の方法」戸川行男氏、および個人発表のあと懇親会が行われた。

また、5月14日（木）には、オランダの現象学派の精神病理学者・文化心理学者、「病床の心理学」「人間ひとりひとり」などの著者でもある J. H. ヴァン・デン・ベルグ博士のセミナーが、コンボケーションにおける同博士の講演後、いったん休憩されてから、午後4時から図書館セミナー・ルームで行われた。参加者は学生18名、教職員9名で、ヴァン・デン・ベルグ博士は今までのご経歴に加えて知的関心のあるところと、あくまでも生きて苦悩している人間の問題に対する態度とを示された。6月教育学科で心理学専修の学生で卒業した者は2名であった。

第1学期が終了し、ここで本研究室の歴史の新しいページが開かれた。それは、開設以来約25年間本館4階に置かれていた教育心理学実験室（全12室）が、新築成った総合学習センター（ILC）の中央棟3、4階（全14室）に移ったことである。その名も心理学第1から第5実験室となり、設備・備品等の一部も新装成った。

想い起こせば、1950年代の半ば、初代心理学教授の岡部弥太郎教授の下、当時非常勤助手であった古畑和孝氏（現東京大学文学部助教授）がプランを練り、第1期生の卒業研究に辛うじて間に合った実験室は、その後次第に拡張され、小部屋のほか広い行動観察室兼セミナー室をも持ち、延 358.425m² に至ったが、学生数の増加に応じて機能的に十分対応が難しくなっていた。新しく出来た実験室は建坪 334m² で（遊戯室が共同利用のため）かえって本館の場合と比べて減少となっているが、機能的には分化し、きめの細かい利用ができるようになった。しかし、研究法の実験実習等についてはいぜん実験室内だけではまかなえない実状である。

土居健郎教授

I 研究活動

私の研究は臨床研究であって、日常の診療活動と不可分である。したがって週二日の聖路加国際病院等における診療が同時に研究活動であるといえることができる。しかしその後の論文の内容から判断して、精神分裂病の病理および言語の精神医学的側面がこの期間の主なテーマとなっていたといえるだろう。

II 学会出席

- 1980年10月 国際価値会議（筑波大学）
- 1980年10月 日本精神分析学会総会（福岡）
- 1981年2月 「分裂症の精神病理」ワークショップ（伊豆山）
- 1981年3月 「沖縄の文化と精神衛生」ワークショップ（沖縄）
- 1981年4月 社会精神医学会総会（市川，精神衛生研究所）
- 1981年5月 日本精神々経学会総会（名古屋）
- 1981年7月 Conference on Cross-Cultural Research in Mental Health
(East-West Center, Hawaii)

III 著作

- 「古沢平作先生と日本の精神分析」 精神分析研究 24巻4号，1980.
- “甘え”再考 「“甘え”の構造」に新に付す。1980.11月
- 「漱石から学ぶ」 日本病跡学雑誌 20巻，1980.19月
- 「内村祐之先生の言葉に寄せて」 「精神医学」誌巻頭言，22巻12号 1980
- 「アメリカ精神医学管見」 「生命の科学」1980,12月（中山書店）
- 「健康・病気・保健学」 「東京医学」37巻，3号，1980
- 書評 ヤン・スィンゲドー「和」と「分」の構造
「聖書と教会」1981.7月号
- 症例研究「まとめ」 「季刊・精神療法」1981.7月号

IV その他（主として講演）

- 1980年9月 日大カウンセラー研修会

- 1980年9月 大阪大学精神医学研究会
- 1980年11月 前橋市市民講座
- 1980年11月 横浜精神療法研究会
- 1981年3月 生命保険協議会
- 1981年6月 東北大学医学祭
- 1981年6月 国際保健機関精神衛生研究研修協力センター指定記念式
- 1981年8月 富士見高原夏季大学

この他に中央教育審議会専門委員，農村生活総合研究センター研究委員，東村山老人問題専門委員を兼ね，委員会に随時出席した。なお神戸大学医学部に集中講義のため1980年10月に出張した。また家庭裁判所研修所に出講したこともある。

原 一雄教授

I 研究活動

- 1) 大脳半球の機能的非対称性
- 2) ニコチンの精神薬理・行動遺伝学的研究（文部省科学研究費一般B，課題番号545019，二年次継続中）
- 3) 大学教育の総合評価——国際基督教大学教養学部30年の歩み

II 学会発表等

- 1) 1980年9月21日 日本動物心理学会第40回大会（青山学院大学）において「マウスの位置弁別逆転学習セットに及ぼすニコチンの影響」を発表。
- 2) 1981年7月24日 日本動物心理学会第41回大会（お茶の水女子大学）において「マウスの逆転学習セットに及ぼす長期ニコチン投与の影響」を発表。

III 著作

- 1) 平野俊二編『現代基礎心理学 12 行動の生物学的基礎』「6章 大脳両半球の統合」東京大学出版会 1981, 203—239.
- 2) （牧野文恵・松村治子・村山興子・島田博美共著）「国際基督教大学における教育環境調査の試み」『教育研究—国際基督教大学学報 I—A』 1980, 23, 111—129.
- 3) （宮森清行共訳）マルコム G. スクーリィ「3000の未来——今後20年間のアメリカの高等教育（カーネギー高等教育政策研究委員会最終報告書—今後20年間に大学が直面する劇的変動の分析（抜粋）」『大学時報』 1980, 29（153），104—111；29（154），94—107.
- 4) （教材フィルム制作指導）大内茂男・金子隆芳監修『大学講座用 現代心理学 編 第一部』「第5集 大脳機能の側性化」文映教育映画社 1981.

IV その他

- 1) 日本心理学会『心理学研究』，『Japansee Psychological Research』編集委

員。

- 2) 日本基礎心理学会設立準備・運営委員。
- 3) 生理心理学・精神生理学懇話会運営委員。
- 4) 東京都精神医学総合研究所非常勤研究員。
- 5) 日本私立大学連盟外国事情調査委員会主査。
- 6) 1981年8月4日 日本私立大学連盟第6回海外大学経営セミナーにおいて「リベラル・アーツ・カレッジの特色」を講演。

星野 命教授

I 研究活動

昭和55年度科学研究費補助金を総合研究Bの種目において研究代表者として申請したところ、「異文化の生活体験が青少年の適応、価値観、アイデンティティに与える変化の社会心理学的研究」の課題に対して100万円の交付があった。これは研究機関を異にする研究者相互の情報交換、研究関心と研究計画などの連絡調整のための旅費・会合費を主体とした補助金で、8名の研究者が年間4回の全体会と、数回の研究会をもつことができた。全体会は、東京(8月)・仙台(11月)・福島(2月)と場所をかえて行われ、仙台と福島では、それぞれ地域の若手研究者も参加した。行われた研究発表としては、「海外帰国子女の異文化同化過程」、「下北半島出身者の職業社会化過程についての再追跡調査(中学在学時から成人中期にいたる15年間)」、「短大生のカルチャー・ショック」、「帰国子女のカルチャー・ショックの要因分析」、「日本人と米国人の非言語コミュニケーション(ジェスチャー)の比較研究」などがあり、司会と総括を担当した。

上記と平行して異文化間心理学研究会の仮称である「文化と人間」の会を、ほぼ隔月に都区内で開催し、ICUの大学院生のほか、早稲田大・お茶の水女子大・青山学院大・筑波大・東京学芸大などの大学院・教員約20名が毎回1・2の研究発表をきき討議に参加する機会を提供した。

国際児童年記念東京大学特別研究「子どもの発育と生活に関する国際的比較研究」のプロジェクトの「家族の文化人類学的研究」の分担研究者として、「東南アジアの子どもの生活と精神発達」の研究を5月からはじめた。

まず文献と現地の状況について資料を収集し、1981年3月29日～4月4日研究協力者の横山広子(東大助手)とICU大学院生2名とともに西マレーシアのクアラルンプールとペナンを訪れ、教育機関(マラヤ大学、ブキット・ビンタン女子中・高校、マレーシア科学大学、障害者施設など)において多民族社会の子どもの生活について観察し記録することができた。

5月からは、ハーバード大学教育学部スタッフの要請を受けて、“Bernard Van Leer Project on Human Potential”(オランダのB.ヴァン・リーア財団の研究

助成による人間潜在能力に関する研究計画)に加わることとなり、慶応大学新聞研 岩男寿美子・国立教育研永野重史・聖マリアンヌ大学深沢道子の3氏と随時研究打合わせを行ない、7月15日—21日の間、岩男教授を除く3名がハーバード大学において先方のチームと緊密な情報提供をおこなった。

このプロジェクトは、むこう1年半続き、その後報告書を出すはずである。

II 学会出席・研究発表等

1980年7月7日から東独ライプチヒ市カール・マルクス大学で開かれた第22回国際心理学会議に出席し、その後西ドイツのビュルツブルグ大学、ミュンヘンのマックス・プランク研究所、ウィーンのプロイト・ハウス、チューリヒ郊外のユンク研究所、パリのサル・ペトリエール病院とサン・タンヌ病院等を見学した。

1980年8月27—29日に北海道大学で開催された日本心理学会第44回大会において「比較文化研究ワークショップ(W35)」の企画・運営を担当した。大会の数か月前から参加希望が募られ、討議内容等を打合わせた上で実施された。全国から約30名の研究者が参加して、いわゆる Cross-Cultural Study の目的・方法(実施手続・結果の分析)などについて問題提起や活潑な討議をすすめた。

上記大会後、その大会への招聘講師であった Dr. Micheal Cole (U. C. S. D.) を東京に迎えてのセミナーに参加し、コメントをのべた。(9月1, 2日)

9月13・14日 関西学院大学で開催された日本社会心理学会第21回大会に出席しシンポジウムI「日本社会心理学に望むこと」II「日本社会心理学の現状と課題」に企画者の一人として参加した。

10月1—5日に筑波大学で開かれたに 1980 International Conference on Human Values に出席し、ワークショップ「価値研究の方法的接近について」において浜口恵俊大阪大学助教授とともにコーディネーターをつとめた。

10月11・12日に八王子大学セミナーハウスで開かれた「心理臨床家の集い」(PC'80)における症例研究会の一つで司会をつとめた。また、この「集い」の5人の準備運営委員の1人として事前の数回にわたる委員会や当日の運営にたずさわった。

11月5—7日に虎の門教育会館で開催された第18回全国学生相談研修会の第3日のシンポジウム「大学における学生相談」で司会をつとめた。また、第2日の問題別討議と第3日の分科会でそれぞれ助言者をつとめた。

11月15日 二松学舎大学で開かれた九学会連合の研究会において日本心理学会会員として「風土と心理学」について、口頭報告を行なった。

11月23日 名古屋大学教育学部で開かれた青年心理学研究会に出席した。

11月29日 東北大学で行われた科研費総合研究(B)の全体研究会を主宰し、翌30日東北福祉大学での第3回人間主義心理学会に出席した。また、1981年5月10日にはICUにおいて同学会の第4回研究集会を共催し、討論に加わった。3月26—28

日に東京で開催された 1981年国際シンポジウム“子供と都市”の第2セッション「子供の文化人類学」のパネル討論会に招かれて報告と討論に参加した。

5月16・17日 駒沢大学で開かれた九学会連合大会に出席し、「日本の風土と社会的行動」について発表した。

6月30～7月5日に関西学院大学千刈セミナーハウスで開かれた日米科学協力事業セミナー「国際化に対する日米の挑戦：組織と文化」に招かれて、最終日の第2報告「日本人のアイデンティティはどうか」を発表し、討論にも参加した。

7月27日～8月1日にフィリピン共和国マニラ市で開催された国際精神衛生会議に出席し、二つのワークショップに参加した。一つは、「人間のライフ・サイクルにおける危機：青春期」で、フィリピンとフィンランドの代表からの報告に引き続いて「日本の青年、特に中・高校生の当面している諸問題」について口頭発表を行った。もう一つは「子どもの精神健康スクリーニング」で、日本からの二つの研究発表をサポートしつつ、司会を担当した。

III 著作・論文

「コミュニティ心理学：その歩みと課題」 社会精神医学 3巻3号, 185—193頁 (1980. 9. 11.)

「文化とパーソナリティ研究の系譜」 サイコロジー 8号, 24—33, 57頁 (1980. 11. 1. 発行)

「臨床的研究の歴史と展望」 『教育心理学シンポジウム：歴史と展望：1959—1959—1978』(第20回日本教育心理学会総会「歴史と展望」刊行委員会編集) 135—145頁, 川島書店 (1980. 9. 30)

「帰国日本人の生活適応とアイデンティティ」 現代のエスプリ別冊 『日本人の構造』(祖父江孝男編集,), 112—150頁 (1980. 10. 1.), 至文堂

「カルチャー・ショックとは何か」, 『心の健康』11月号, 社団法人 精神衛生普及会。(12—19頁)

「カルチャー・ショックとは何か(続)」, 同上 12月号, 4—11頁。同上。

「海外研究動向東アジア」 『現代心理学の動向 1946～1980』(編集代表 肥田野直), 303～312頁, 川島書店。(1980. 11. 29)

「概説・カルチャー・ショック」 現代のエスプリ 161号, 5—30頁。(1980. 12. 1), 至文堂。

「帰ってきた私たち——帰国学生の自叙伝から」 現代のエスプリ 161号, 223—228頁 (同上)

「心理学における異文化間研究—異文化間心理学の特質と課題」, 心理学評論 22巻3号, 214—235頁。(1980. 12. 30. 発行)

「講座/世界の教育理論(第48回)オルポート」, 教育心理, 29巻1号, 74—79頁。

日本文化科学社。

「欲望の心理——人間学的アプローチから——」，青年心理，26巻，6～22頁。
(1931. 5.)

「異文化体験のもたらすもの」海外子女教育，1981年6月号，40～42，46頁。

「家庭における感動の教育」，家庭教育選集1，家庭教育，99—115頁，金子書房。
書評：藤岡喜愛著『イメージと人間——精神人類学の視野』（NHK ブックス），
民族学研究，45巻4号，386—7頁。（1981. 3. 30）

IV その他

前年度に引き続き，日本心理学会発行の「心理学研究」および *Psychological Research* 両誌の編集委員，日本社会心理学会常任理事（'80年12月まで），理事（'81年1月より），日本学術会議心理学研究連絡委員会委員，日本学生相談研究会理事のほか，81年1月に創立された「異文化間教育学会」（会長 小林哲也京都大学教授）の理事に選ばれた。

また，1980年春より，前記の世界精神衛生連盟主催の1981年国際精神衛生会議の日本国内連絡委員長として日本からの参加者・発題者のプロモーションに従事した。会期中の総会において西太平洋地区担当の連盟副会長の一人に指名された。

次の諸大学の非常勤講師をつとめた。

聖心女子大学文学部「対人コミュニケーションの社会心理（1980，'81 通年），東京大学大学院社会学研究科「心理人類学」（1980年通年），桐朋学園短大「異文化間コミュニケーション」（1980年後期），【東北大学文学部「臨床心理学」（12/1—12/6 集中講義）。東京都立大学人文学部大学院「異文化間心理学」（1981年前期）。

下記の演題で講演などを行なった。

1980年8月7—9日 「生徒個人への対応とカウンセリング」，「体験学習：傾聴と受容」，「同：積極的関心とフィード・バック」 「カウンセラー，その役割を越えて」 香川県高校教育相談研修会

9月24日 「カルチャー・ショックについて」 精神衛生普及会主催 於神田同会

11月13日 「臨床心理学の現状と課題」厚生省全国心理・職能判定員研修会 於所沢国立身障者リハビリテーション・センター

1981年3月9日 「中学生の行動と心理」 捜真中学校一年生母の会。

3月16日 「カウンセリング・グループ学習」立正佼正会カウンセリング・センター（東京中野）。中堅カウンセラーの実地研修。

5月7日 「親と子のライフ・サイクル」 親業訓練協会主催インストラクター講習会。於オリンピック記念国立青少年センター

6月19—21日 「対人コミュニケーション体験学習合宿」聖心女子大学対人コミュニケーション受講者グループ，於逗子・松汀園

- 6月23日 「カウンセリングの原理と教会教育」 日本基督教団東京地区教師研修会
於 渋谷教会
- 6月27日 「異文化体験のもたらすもの」 神戸 YMCA 開発教育研究会・異文化間
教育学会共催。於神戸 YMCA.
- 7月1日・8日 「日本人の国民性 (1)・(2)」, 横浜朝日カルチャー・センター
- 8月20—21日 「日本人にとっての異文化体験」, 第2回海外子女教育セミナー『海
外子女教育の現状と展望』第1日講演。於東京学芸大学

都留春夫教授

I 研究活動等

国際教育交流については、大学の国際化、異文化間カウンセリングなどに関する初歩的な研究をはじめた。カウンセリングとフォーカシングの関係では、実践と共にケース研究会などを通しての研究を継続している。

- (1) 国際教育交流 1980年秋にはミネソタ大学の Mestenhauser 博士を中心にして
国際教育交流連セミナー及び Intercultural Communication Work shop に参加
した。
- (2) カウンセリングについては、毎例のケース研究会をつづけている。
- (3) フォーカシングの関係では、月1回勉強会を開き、技法の開発と理論的背景の
検討を行っている。
- (4) グループ・アプローチに関する実践研究の一環として、大学生のグループ合宿
や Person Centered Approach (PCA) Week end を開催している。

II 学会活動・講演会等

- (1) 日本心理学会第44回大会に参加した。機関誌「心理学研究」掲載論文の英文ア
ブストラクトの校閲を担当した。
- (2) 国立療養所幹部看護婦（リーダーシップ育成）継続研修会 1980年7月及び1981
年7月。講師
同基礎研修会 1980年10月。講師
- (3) 東京大学学生相談室「自己理解のためのグループ合宿」。1980年8月及び1981年
3月。スタッフ。
- (4) 日本看護協会において講演「患者の心理」 1980年7月。
- (5) 全日本カウンセリング協議会カウンセリング・ワークショップ 1980年7月。
フォーカシング実習。講師。
同。1981年7月、世話人として参加 フォーカシングの実習指導及びアンドレ
・オウ博士の講演の通訳を担当。
- (6) 1980年心理臨床家の集い、■1980年10月、心理技法ワークショップ（研修会）講
師（「焦点づけ技法」担当）

(7) 異文化間教育学会発表大会（1980年1月），研究会（1981年4月）第2回大会（1981年6月）に参加。

(8) ビデオ教材によるカウンセリング研究講座（日本・精神技術研究所主催）
1980年8月。講師

(9) PCA Weekend 合宿ワーク・ショップ 1980年8月及び1981年1月

Ⅲ 著作・執筆

(1) 「人間成長への叱りの役割」桂広介他編 『家庭教育選集(2)—家庭のしつけ』
金子書房 1981. 金子書房, 114—127頁

(2) シリーズ「人間の教育」, 福音社発行月刊雑誌「サイエンス・オブ・ザ・タイムズ」に12回連載, 1981年。第80巻1—12号

(3) 雑誌『カウンセリング』（全日本カウンセリング協議会発行）

(a) 「なかまづきあいを求めて—その14— すこやかさとのであい(2)」 Vol. 12—
3 (No. 49 1981) 11—20頁

(b) 「なかまづきあいを求めて—その15— すこやかさとのであい(3)」 Vol. 13—
1. (No. 51, 1981) 16—20頁

(c) 「フォーカシング勉強会ノート(1)」 Vol. 12—2 (No. 48, 1981) 11—13頁

(d) 「フォーカシング勉強会ノート(2)」 Vol. 12—4 (No. 50, 1981) 16—24頁

(4) 雑誌『児童心理』（金子書房発行）

(a) 「思いやりについて」 第34巻 第13号 1—15頁

(b) 「『アキラメ』の心理」 第35巻 第7号, 69—74頁

栗山容子講師

I 研究活動

・ 8—24ヶ月の乳幼児のものを扱う行動におけるひとまとまりの行動（行動連鎖）の質的分析を行ない、発達の観点から変化を探る。

・ 交信行動の発達を捉えるため、生後3ヶ月より観察を続けている乳児の資料収集と分析を行なっている。

II 学会発表

・ 日本心理学会第44回総会に於て「初期言語発達と象徴遊びの発生(3)言語と模倣の発達」発表 8.27~8.29 1980.

・ 日本教育心理学会第22回総会論文集「学習者自身による多肢選択テストの作成と評価」総会に出席 10.29~10.31, 1980.

・ 日本音声言語医学会第25回総会に於て、「ことばの反復についての縦断的検討——操作課題を用いて——」共同発表 11.56~11.16 1980. 音声言語医学 vol. 22: 1981.

III 論文

「初期言語発達の様相——感覚運動期から表象期へ」 肥田野直他共同執筆，東京大学教育学部紀要，第20巻，1981.

向井敦子助手

I 研究活動

- (1) 幼児のひらがなの読みと書きに関する研究
- (2) 3名の乳幼児を対象にした乳幼児の行動の形成と変容の過程の縦断的観察
- (3) 筆者等の作成した心理学的行動座標を利用した諸行動の発現・展開・終止の条件の探索

II 学会発表

- (1) 1980年8月，日本心理学会第44回大会において，「協同作業状況での成功・失敗経験と行動調整の連鎖特性」を発表（同論文集 p. 687）
- (2) 1980年10月，日本教育心理学会第22回総会において，「協同作業状況に対する印象と行動の連鎖特性との関係」を発表（同論文集 p. 646—647）
- (3) 1981年8月，『日本教育心理学会第23回総会において，「ひらがなの型弁別および型構成における発達特性の分析 I. 問題と方法 II. 大学生と幼児の型弁別特性の分析 III. 幼児の型構成特性の検討および型弁別段階との関係」を発表（同論文集 p. 464—469）（深谷澄男・川瀬正裕・吉田薫との共同研究，向井はIIIを口答発表）

III 著作

- (1) 「心理学的行動座標の仮説的構成の試み」 国際基督教大学学報 I—A 教育研究，1980，23，131—152（深谷澄男との共著）
- (2) （共著）「中学時代の友だち関係一同調と反発」 加藤隆勝編（1981）女子中学生の心理 3章 大日本図書 p. 57—78.

D 視聴覚教育研究室

学部学生のための視聴覚教育・教育工学・コミュニケーション関連の授業科目は長らく教育心理学専修プログラムに含まれていたが，1981年4月より教育工学・コミュニケーション（Educational Technology and Communication, 略称 ETC）という新設の専修分野にまとめられた。

視聴覚教育研究室に事務局を置く日本視聴覚教育学会及び日本放送教育学会（会長西本三十二名誉教授）の合同大会が，1980年10月11日（土），12日（日）の両日，湘北短期大学において開催された。当研究室からは教職員と大学院生多数が参加した。

阿久津喜弘教授は引き続き教育学科長の職にあたり，一年間研究休暇をとって

た石本菅生準教授は1981年4月に帰任した。

阿久津喜弘教授

I 研究活動

- (1) 昭和55年度放送文化基金の助成・援助による共同研究「放送関係文献総目録の作成」を実施。
- (2) 「新・教育社会学辞典」を共同編集。
- (3) 現代教育研究会の一員として、現在の教育課題について分析。

II 学会発表等

日本教育社会学会第32回大会（1980年9月20日—22日，東北大学）において、「青少年意識・マスコミュニケーション」部会を司会。

III 著作

- (1) 「情報化状況における教育課題」『教職研修』9巻6号，1981年，89—93頁。
- (2) 「1980年代の視聴覚教育の課題と展望」『視聴覚教育』35巻2号，1981年，43—44頁。
- (3) 「情報化状況の特質と人間形成」『教職研修』9巻12号，1981年，61—65頁。
- (4) 「非言語的コミュニケーション」『教育と医学』29巻9号，1981年，77—83頁。

IV その他

日本視聴覚教育学会理事・編集委員。

日本放送教育学会理事・編集委員。

日本教育社会学会渉外部長・国際交流委員。

大学セミナー・ハウス 共同セミナー委員。

中野照海教授

I 研究活動

- 1) 映像の授業過程における機能（「映像と教育」研究集団，放送文化基金による継続研究）
- 2) 教育工学の理念・方法・技法に関する資料収集と体系化の試み（編著として図書文化出版より出版予定）
- 3) 視聴覚教育の評価に関する研究（雑誌「視聴覚教育」に連載中）
- 4) 文部省特定研究「大学における教育方法の改善」に参加。
- 5) 「授業の設計と授業のモデル」を日本教育心理学会第22回総会（1980年10月31日），シンポジウム「授業の設計と実施」において発表。

II 著作

- 1) 「1980年代の視聴覚教育の課題」，『視聴覚教育』2月号，1981年，24—27頁。
- 2) 「メディアの効果をめぐって」，『視聴覚教育』5月号，1981年，24—28頁。

- 3) 「研究課題の操作化について」、『視聴覚教育』6月号, 1981年, 32—35頁。
- 4) 「整合性の評価について」、『視聴覚教育』7月号, 1981年, 24—27頁。
- 5) 「メディア活用の単位またはチャンクをめぐって」、『視聴覚教育』8月号, 1981年, 48—51頁。
- 6) 「特性・処遇・課題交互作用をめぐって」、『視聴覚教育』9月号, 1981年, 30—33頁。

Ⅲ その他の活動

- 1) 全国放送教育研究連盟（札幌）, 「放送教育研究のすすめ方」講義, 1980年, 8月12日。
- 2) “New Media, Technology and Education”, Lecture, International Workshop on Educational Broadcast, NHK Central Institute for Research and Training, Sept. 25, 1980.
- 3) 全国放送教育研究連盟第31回大会, シンポジウム「中学校における放送教育の諸問題」提案, 1980年10月9日（札幌）。
- 4) 四国地方放送教育研究会第22回大会, 「中学校における放送教育とゆとり」講演, 1980年10月20日（徳島）。
- 5) 近畿ブロック放送教育研究会, 「これからの放送学習を考える」講演, 1980年10月14日（京都）。
- 6) 関東大学放送教育研究会, 「放送教育研究の推進」, 1980年12月14日（東京）。
- 7) 京都大学教育学部, 「授業の設計をめぐる諸問題」集中講義, 1980年12月19日—24日。
- 8) 社会教育指導主事講座「視聴覚教育の理論」講義, 1981年1月10日（国立社会教育研究所）。
- 9) 広島県小学校教育研究会「授業と新しい教育方法」講演, 1981年5月21日（広島県五日市町）。
- 10) 視聴覚教育上級指導者講座, 「世界の教育方法改善の動向」, 1981年7月9日（国立社会教育研究所）。
- 11) 全国高等学校放送教育研究会特別研修会, 「放送教育の評価の方法」, 1981年7月29日（熱海）
- 12) 埼玉県放送教育研究会, 「放送教育の新しい展開」, 1981年8月26日（国立婦人教育会館）。
- 13) 放送 NHK 教育テレビ「中学校における放送教育の推進」1980年8月13日, 「放送学習をめぐって」, 1980年10月9日, NHK ラジオ「中学校におけるゆとりと放送教育」1980年10月26日, 「放送教育への提言」1980年11月26日。
- 14) 学会等における委員・役職（1981年8月31日現在）
 - a. 日本視聴覚教育学会常任理事, 同学会「視聴覚教育研究」編集委員。

- b. 日本放送教育学会常任理事，同学会誌「放送教育研究」編集委員長。
- c. 「日本教育工学雑誌」（文部省・教育工学センター協議会）常任編集委員・編集幹事。
- d. 日本語学ラボラトリー学会評議員。
- e. 教育放送審議会（文部省）委員
- f. 視聴覚センター，ライブラリー小委員会（文部省）委員
- g. 日本教育工学協会理事
- h. 「視聴覚教育賞」（文部省・日本視聴覚教育協会）選考委員
- i. NHK 学校放送諮問委員会（東京都）委員
- j. 国立放送教育開発センター委員
- k. 全放連第33回全国大会（埼玉県）指導委員

石本菅生準教授

I 研究活動

A. マイコンコンピュータの教育利用研究

- 1) 統計処理パッケージ(II)の開発
- 2) 反応分析データ処理プログラムの開発
- 3) 乱数実験による統計学習プログラムパッケージの開発
- 4) 採点処理システムの開発
- 5) CAI 言語インタプリタの研究開発
- 6) 教材作成用テーブルプロセサの作成
- 7) KWIC インデックスの作成及び検索システムの開発
- 8) テストアイテムバンクシステムの開発
- 9) 英文速読システムの開発と実験的研究

B. 大学入試における学力テストと能力テストの比較研究（教育研究所プロジェクト）の一環として，研究データ解析のためのコンピュータプログラムシステムの開発。

II 学会参加

日本視聴覚教育学会第17回，日本放送教育学会第25回 連合大会に参加
1980年10月11～12日，於湘北短期大学

III 著作

授業実践に生かす教育工学シリーズ 第3巻第4章「教育情報の活用」図書文化社（印刷中）

IV その他

- 1) 1980年4月より1年間，研究休暇を得た。

- 2) 総合学習センターの自主学習室，教材開発室及び教授学習分析教室の設備，機材等の仕様の決定，業者との折衝にあたった。
- 3) 1980年12月～1981年1月，私用でフランスおよびイギリスへ旅行。ロンドンで Association for Educational Technology を訪問。CBL (Computer Based Learning) に関する資料を収集した。
- 4) 1981年7月，インドネシアへ出張， Association of Christian Universities and Colleges 主催の Instructional Technology ワークショップに ICU を代表して参加した。
- 5) 日本視聴覚教育学会理事，日本教育工学雑誌刊行会編集委員をつとめる。

浜野保樹助手

I 研究活動

- 1) 昭和55年度前期放送文化基金の助成による「2歳児テレビ番組研究」(代表者・白井常東京女子大学名誉教授)に参加。
- 2) 国立放送教育開発センターが実施した諸調査に参加。
- 3) Japan-Singapore Training Center において，自作ビデオ教材について講義(1981年8月31日～9月2日)。
- 4) 1980年10月11日，日本視聴覚教育学会第17回・日本放送教育学会第25回合同大会(湘北短期大学)において，「教育テレビ番組の制作変数について(2):小学校以上を対象とする教育テレビ番組の特性:予備的研究」(浜野保樹，青木繁，平井出けい子)を発表(同学会論文集，13-14頁)。口頭発表者は浜野。
- 5) 1981年8月26日，第5回日本科学教育学会年会(北海道教育大学)において，「教師教育における教育工学関係カリキュラムの開発(その1)」(篠原文陽児，他)を発表。

II 著作

- 1) 「教育テレビ番組の制作変数について(3):幼児と映像言語」，浜野保樹，平井出けい子，『ICU 教育研究』23，1980，153～171頁。
- 2) 『放送利用の大学公開講座に関する実施報告書・昭和54年度』，国立放送教育開発センター，1981。
- 3) 「文献紹介:G. Comstock et al. (1978) *Television and Human Behavior*」，『視聴覚教育研究』第12号，1981，73～77頁。

III その他

- 1) 日本教育社会学会研究部員。
- 2) 国立放送教育開発センター調査研究協力者。
- 3) 文部省社会教育審議会教育放送分科会小委員会，視聴覚センター及び視聴覚ライブラリーのあり方に関する調査研究協力者。

E 理科教育法研究室

山口俊夫教授は1981年4月に一年間の研究休暇を終えて帰任された。ウォース教授は、1981年4月から1年間の研究休暇をとられ、米国に帰国されている。三宅彰教授はひきつづき、教育研究所所長並びに図書館長の職につかれている。

理科教育研究室では理科教育の大学院学生、及びICU大学院理科教育の卒業生である高校教師と協力しながら講師を招いて下記のような研究会を開催した。

- (1) 1981年1月24日 石黒浩三教授(東京理科大学): 理科Iの指導原理の探究
- (2) 1981年3月14日 松井吉之助教諭(調布市立中学): 「物質の探究」をめぐって
- (3) 1981年6月12日 石川光男教授(ICU): 理科教育の評価と創造性
- (4) 1981年6月27日 小島秀夫教授(横浜国立大学): 理科の授業】

石川光男教授

I 研究活動

1. 生体高分子に対する放射線効果
2. 理科教育における総合的評価法の開発と分析
3. 一般教育におけるコンピューター利用法の研究
4. 自然科学と関連のある他の諸分野との学際研究の推進

II 学会発表等

1. 第2回学際研究会議(1980年12月, 東京): 宗教と科学の補完的性格

III 著作

1. Degradation of Calf Thymus DNA by Ultra-Violet Light (II); Rep. Progr. Polymer Phys. Japan, 23 (1980), 791—792, (K. Takakura, M. Ishikawa)
2. The Effects of X-Rays on Aqueous Solutions of Poly (L-Tyrosine); Rep. Progr. Polymer Phys. Japan, 23 (1980), 695—696, (M. Ishikawa, K. Takakura)
3. 「宗教と科学の補完的性格」, 『80年代の価値と日本』(共著), 教育出版センター, 1981年, 173—199

IV その他

1. 「今の入試に改善の余地はある」(座談会), 『大学時報』第30巻(1981)156号, 18—36
2. 「物理学と精神世界」(対談), 『たま』, 第13号(1981)16—29
3. 「理科教育の評価と創造性」(発題), ICU大学院理科教育研究室, 1981年6月12日
4. 「物理学と精神世界の接点」(講演), 心霊科学協会, 1981年7月26日

5. 「気と潜在意識のはたらき」(講演), 心霊科学協会, 1981年8月24日
6. 第2回学際研究会議実行委員

柿内賢信教授

I 研究活動

水の構造とそのダイナミックス
 知識と意志決定(人類学的アプローチ)
 帰納の構造について

II 学会発表等

Five Lectures on General Education
 at General Education Office, Chulalongkorn University, Dec. 1980

Structural Anomaly of Liquid Water

Physics Colloquium, Chulalongkorn University, Dec. 1980

III 「理解の分析と評価について—ある事例研究」一般教育学会誌 2 (1980) 40

Science of Matter. A place where physics and chemistry meet. Part I.
 Atoms and Molecules in an Integrating Approach to Science Education
 (1980) p. 1 (ICU)

「科学教育」増補改訂 世界教育事典 ぎょうせい (1980)

「変動する社会の中の科学教育」科学振興二十年(東レ科学振興会) 1981

「アインシュタイン 科学者として人間として」(共訳) 培風館 (1981)

IV その他

財団法人 俱進会理事長
 科学教育学会顧問
 学校法人 音羽幼稚園理事
 宗教法人 宗教音楽研究所理事
 国際物理教育委員会委員

三宅 彰教授

I 研究活動

- 1) stiff chain の統計とブラウン運動論との関係を明らかにした。
- 2) 高分子のスケーリング理論の応用, 特に枝分れ高分子鎖の拡がりへの適用を試みた。
- 3) 大学の国際化と言語の問題に関する試論。

II 学会発表等

- 1) 高分子材料自由討論会(1980年7月22日, 草津): 高分子研究の新しい概念「スケーリング」をめぐって

2) 日本物理学会分科会 (1980年10月4日, 福井大学): Twisted Stiff Chain モデルの特徴

3) 高分子材料自由討論会 (1981年7月15日, 草津): 枝分れ高分子鎖の拡がり
III 著 作

1) Stiff Chain Statistics and the Theory of Brownian Motions: Repts. Progr. Polym. Phys. Japan, 23 (1980) 91—94.

2) Theory of Twisted Stiff Chains, IV: J. Phys. Soc. Jpn. 50 (1981) 281—285. (A. Miyake and Y. Hoshino)

3) Stiff-Chain Statistics in Relation to the Brownian Process: J. Phys. Soc. Jpn. 50 (1981) 1676—1682.

IV その他

1) 社団法人日本物理学会監事 (1980年9月—1982年8月)

2) 財団法人大学セミナーハウス評議員 (1976年4月—現在), 同運営委員 (1980年8月—現在)

3) 財団法人東京高等学校同窓会理事 (1979年11月—1981年11月)

4) 広島大学大学教育研究センター客員研究員 (1978年4月—現在)

5) 昭和56年度文部省科学研究費補助金総合研究(A)「高分子の分子運動と相形成に関する理論的研究 (研究代表者: 倉田道夫)」の研究分担。

勝見允行教授

I 研究活動

a. ジベレリン (植物ホルモン) の細胞伸長促進の作用機作に関する研究。

b. 「続植物ホルモン」 (朝倉書店刊行予定) を共同執筆中

c. IIS による生物学の CAI プログラム作成

II 学会発表等

a. 勝行允行・風間晴子・山田順子: キウリ下胚軸表皮葉緑体に於るデンプン形成に及ぼすジベレリンの影響, 日本植物学会第45回大会, 仙台, 1981年9月

b. 風間晴子・勝見允行: ジベレリンのキウリ下胚軸伸長作用—糖の関与, 日本植物生理学会1981年度年会, 札幌, 5月

c. Katsumi, M.: Control of Cell Elongation by Gibberellin. Symposium on Control of Cell Elongation. XIII International Botanical Congress. Sydney. Aug. 1981.

III 著作

a. Katsumi, M. and N. Kawamura. 1980. Physiological effects of cotyledons on gibberellin-induced cucumber hypocotyl elongation. Plant & Cell Physiol. 21: 1439—1448.

b. 勝見允行・風間晴子：植物ホルモン(T. A. ヒル著)訳書，朝倉書店 1981.

IV その他

a. 講演「国際基督教大学における CAI システムについて」，教育機関インダストリーエグゼクティブ・セミナー，IBM. 1980年5月，9月，1981年5月，9月.

b. 講演「生命は操れるか」，富士見町夏期講演会，長野県富士見町，1981年8月.

山口俊夫教授

I 研究活動

- 1) 筋収縮抑制剤・ダントロレン Na による骨格筋の興奮収縮連関に関する研究。
特に筋細胞の興奮時におけるイオン電流と収縮抑制効果について。
- 2) 骨格筋の脱筋鞘標本線維の微細構造に含まれる元素の凍結切片法による X線微量分析。

II 学会発表等

- 1) 骨格筋細胞に及ぼす dantrolene Na の作用部位について
日本動物生理学会第2回大会。1980年12月2～4日，大阪
- 2) 両棲類筋線維の内部系への諸種アプローチと E-Ccoupling
第58回日本生理学会大会，1981年4月1～3日 徳島

田坂興亜準教授

I 研究活動

1. 高校理科への総合的アプローチ
2. 有機リン化合物の合成・反応・分析

II 学会発表等

“An Integrated Approach to Selected Topics in Secondary Science Education (JAPAN)”

6th International Conference on Chemical Education. Aug. 9—14, 1981, at Univ. of Maryland.

F 英語教育法研究室

1981年7月20日(月)：Amsterdam 大学の Henk C. Van Riemsdijk 教授による講演会。場所は ICU，テーマは「Representational Grammar vs. Derivational Grammar」。

1981年8月10日(月)：California 大学 (Berkeley) の Charles Fillmore 教授，MIT の John R. Ross 教授による講演会。場所は上智大学の第四会議室を借

りる。テーマはそれぞれ、「Special Deixis」,「The More the Merrier」であった。

以上はいずれも、英語教育専攻の大学院学生が準備し、文部省の助成金（代表・井上和子教授）の補助を受けたものである。

1981年8月27日、28日（木・金）：語学科に協力、第20回ICU夏季言語学研究会を開催、研究発表数23、野崎昭弘教授（ICU）、川本茂雄教授（早大）による講演を含む。参加者は約210名。

1981年4月、語学科に協力して、*Descriptive and Applied Linguistics* 第14巻を発行。

1981年8月27日（木）午後5時半、大学食堂において、英語教育科の同窓会を開催。

井上和子教授

I 研究活動

- (1) 日本語の基本構造に関する変形理論と語彙理論の対照研究
- (2) 日本語の談話構造と文一文法の接点
- (3) 言語学の諸分野（下記）における研究動向調査：(a) 国内国外における日本語研究に関する調査 (b) 英語圏における英語学研究 (c) 英、独、仏、西語圏における英語学研究 (d) 社会言語学、方言学 (e) 記号学 (f) 言語心理学 (g) 言語類型論的方法による言語研究（特定研究Ⅰ。「学術動向の調査研究」—研究代表者、岡村総吾一の研究分担者）

II 学会発表

- (1) シンポジウム発題「コミュニケーションの発達」シンポジウム『成長と発達』医学研究振興財団、56年1月17日、18日
- (2) “A type of represented speech in Japanese and its function in a discourse,” presented at the Middlebury Symposium on Japanese Discourse Analysis. (to be published in the proceedings of the symposium)
- (3) “Transformational vs Lexical Analysis of Japanese Complex Predicates,” presented at the 1981 Seoul International Conference on Linguistics, July 29 - August, 3, 1981, (to be published in the proceedings of the conference)

III 著作

- (1) 「生成文法の軌跡」『言語』Vol. 9, No. 11, 1980, 4—13
- (2) 「言語とは」相沢豊三監修、長谷川恒雄編集『失語症の基礎と臨床』第1章、19—33、金剛出版。
- (3) 海外新著紹介、『規則と表示』N. チョムスキー著、『言語』Vol. 9, No. 10,

1980, 66—71. (書評)

- (4) 『英語と日本語と——林栄一教授還暦記念論文集』 林栄一教授還暦論文集刊行委員会編, 『英語展望』 No. 71. Autumn, 1989, 45—46. (書評)
- (5) 『言語論』 Emmon Bach. *Syntactic Theory*, (Holt, Rinehart and Winston, 1974) の翻訳 (原田かつ子と共訳) 大修館書店 1981, 2月 (翻訳)

IV その他

- (1) 文部省学術審議会委員
- (2) ユネスコ国内委員
- (3) ユーゴスラビア, ベオグラードにおけるユネスコ総会に, 政府代表団の一員として出席, 社会科学委員会副議長
- (4) 第13回国際言語学者会議—1987, 8月28日—9月4日—事務総長
- (5) 講演「人間のことばの発生とコミュニケーション」公開講演会, ライフプランニングセンター, 56年4月18日
- (6) 「ことばのしつけ」『言語』 Vol. 9. No. 7—4—9.
- (7) 『学術月報, 卷頭言「人文科学における科学性」—言語学の例, 81年6月, 学術振興会
- (8) 東京外国語大学アジア・アフリカ研究所 運営委員
- (9) 大学英語教育学会評議員
- (10) 日本言語学会委員, 会計監査

小林栄智教授

I 研究活動

1. 古英語, 中英語に関して
2. 英語教材

II 学会

1. 日本英文学会第53回大会 (於 創価大学), 第五室 前半 司会
2. 中世英文学談話会第26回 (於 学習院大学), 出席

III 論文

1. “The Middle English *Apollonius of Tyre*, Notes and Glossary,” *Annual Reports*. 5 (1980), 1—58.
2. “Corrigenda & Addenda in the Middle English *Apollonius of Tyre*, *Annual Reports*, 5 (1980), 1—58,” *Annual Reports*, 6 (1981), 49—71.

リチャード・リンデイ教授

I 研究活動

“The improvement and standardization of the methods and content of

second language learning," a research section of the Monbusho Research Grant project "The standardization of language," (MONBUSHO TOKUTEL KENKYU), started Sept., 1981.

II その他

Editing : New Prince English Course Books, 1, 2, and 3, Kairyudo, 1981-1983.

村木正武教授

I 研究活動

Montague Grammar, 談話構造における視点の移動の問題, 音韻論における規則の順序付け。

II 著作

「書評：坂井秀寿著『日本語の文法と論理』 勁草書房発行」, 『英語学』, 開拓社 (校正済み)。

「書評：太田朗著『否定の意味』, 大修館書店発行」, 『英語学』, 開拓社 (脱稿)

"Constituent Negation and Propositional Negation", 『教育研究』 (脱稿)

F. C. パン教授

I Research Activities

(1) Neurolinguistics :

"Central Nervous System Control of Language"

(2) Sociolinguistics :

"Language and Society"

(3) Sign Language :

"手話構造の基礎的研究" 文部省科学研究費 昭和56年度総合研究(A).

II Reports

The First Internatinal Conference on the Language Sciences : (1981)

(1) "The Place of Sociolinguistics in Language Sciences"

(2) "Sex-Differentiation in Language Variation : A Sociolinguistic Contribution to Language Sciences"

The Second East-West Sign Language Association Annual Conference(1981)

The Seventh LACUS Forum. Houston. Texas. (1980) "文字からくる手話"

Historical Linguistics and Sign Language"

III Publications

(1) "Historical Linguistics and Sign Language" in *The Seveth LACUS Form,*

- 1980, Hornbeam Press, Incorporated, 1981.
- (2) *Varieties of Sign Language* (手話のいろいろ), Fred C. C. Peng (ed.), The East-West Sign Language Association, 1981.
- (3) *Language as Social Behavior* (ことばの社会性), Motoko Hori and Fred C. C. Peng (eds.), Bunka Hyoron Publishing Company, 1981.
- (4) *Aspects of Language Acquisition*. (言語習得の諸相), Motoko Hori and Fred C. C. Peng (eds.), Bunka Hyoron Publishing Company, 1981.
- (5) *Language Sciences*, Volume, 2, No. 1, Fred C. C. Peng (ed.) 1980.
- (6) *Language Sciences*, Volume, 2, No. 2, Fred C. C. Peng (ed.) 1980.
- (7) *Language Sciences*, Volume. 3, No. 1, Fred C. C. Peng (ed.) 1981.
- (8) *Language Sciences*, Volume, 3, No. 2. Fred C. C. Peng (ed.) 1981.
- (5)~(8) Published by ICU Language Sciences Summer Institute
- (9) “手話言語とは” in *Varieties of Sign Language*, 1981.
- (10) “手話の変貌と比較：特に、日本、台湾と中国の手話に基づいて” in *Varieties of Sign Language*, 1981.
- (11) “生後2年間の言語発達率と運動神経の相関々係” in *Aspects of Language Acquisition*, 1981.

2. 大学院教育学研究科修士論文

1981年3月卒業者 13名

A. 教育哲学

岩本祐生子 伊沢修二の国民教育思想についての一考察

山室 吉孝 ジョン・デューイとピューリタニズム

B. 教育心理学

川瀬 正裕 幼児に対する色・形次元の変換操作を促す課題が弁別移行学習に及ぼす効果

窪内 節子 識別における知覚的構えについて

楠本 景子 日本語文の処理過程に関する実験的研究

——漢字仮名混じり文とひらがな文の比較——

村上千鶴子 大学生の性差意識と自己概念の変化に及ぼすロールプレイングとロールテイキングの効果

斎藤 舘 学業不振生徒の指導についての一考察

——学習意欲と親子関係に主眼をおいて——

C. 英語教育法

- 青木理恵子 A Study of English With-Phrases
 早坂 慶子 A Study of Can and May in *Ancrene Wisse*
 北川 善久 An X Theoretic Approach to English Pronouns
 中道 嘉彦 The Historical Present in *Sir Gawain and the Green Knight*
 並河美也子 A Lexical Analysis of Derived Adjectives :
 A Case Study of -able Adjectives
 鷺尾 龍一 Towards a Mixed Theory of Lexical Grammar

1981年6月卒業生 4名

A. 視聴覚教育法

- 海崎 隆次 英字新聞教材による英語学習意欲と英語力に関する調査
 浦田 俊之 総合テストとしてのディクテーションの機能に関する実証的研究

B. 英語教育法

- ピーク・内田美枝子 Jane Austin's Optimism - A Study of Punishment
 and Rewards
 山口 常夫 An Analysis of Cartoon Discourse
 — A Sociolinguistic Approach —

3. 教育実習報告

1980年度の教育実習には127名の学生が参加した。その詳細は次のとおりである。

1. 実習生総数 127名

男子 39名

女子 88名

2. 実習日程

- 1980年4月21日～5月10日 富山大学教育学部附属中（富山）
 5月6日～5月19日 桐蔭学園（神奈川）
 5月12日～5月24日 武生市武生第三中（福井）
 5月19日～5月31日 神奈川県立横須賀高，山手学院（神奈川），宮城学院中
 （宮城）
 5月26日～6月6日 国際基督教大学高（東京）
 5月26日～6月14日 筑波大学附属高（東京）

- 5月29日～6月13日 神戸女学院中（兵庫）
- 6月2日～6月14日 中野区立第七中，新宿区立東戸山中，文京区立第十中，三鷹市立第六中，小金井市立緑中，府中市立府中第五中，町田市立南大谷中，狛江市立狛江第二中，上野学園中，都立三田高，都立立川高，都立戸山高，都立豊多摩高，都立八潮高，調布学園，頌栄女子学院高，巣鴨女子高，郁文館高，国際基督教大学高（東京），秋田市立秋田南中（秋田），県立安積女子高（福島），浦川原村立浦川原中，県立新潟高，県立高田高，敬和学園高（新潟），県立屋代高，松本深志高（長野），県立宇都宮女子高（栃木），北橋村立北橋中（群馬），浦和市立大谷場中（埼玉），県立生田高，県立藤沢高，成美女子高（神奈川），御勅使中，県立日川高（山梨），和歌山市立紀伊中（和歌山），県立西宮高，県立洲本高（兵庫），引田町立引田中（香川），福岡女学院高（福岡），九州女学院高（熊本），鹿児島市立紫原中，県立伊集院高（鹿児島）
- 6月3日～6月16日 横浜市立松本中（神奈川）
- 6月3日～6月28日 横浜市立根岸中（神奈川）
- 6月9日～6月21日 三鷹市立第一中，三鷹市立第五中，東村山市立東村山第一中，武蔵野市立第二中，武蔵野市立第三中，町田市立成瀬台中，中野区立第五中，練馬区立旭丘中，目黒区立第九中，杉並区立井草中（東京），川崎市立富士見中，浦和市立三室中（埼玉），市川市立第五中（千葉），沼津市立片浜中（静岡），大阪教育大学附属高校池田校舎，大阪教育大学教育学部天王寺校舎（大阪），西宮市立浜脇中（兵庫），明星学園，都立久留米西高，麻布高（東京），大宮市立南中（埼玉）
- 6月9日～6月28日 横浜市立南中（神奈川）
- 6月16日～6月27日 東洋英和女学院中，女子学院中（東京），フェリス女学院（横浜）
- 6月16日～6月28日 熊本市立西原中（熊本），桐朋女子高（東京）
- 6月17日～6月30日 女子聖学院（東京）
- 6月23日～7月4日 聖心女子学院（東京）
- 6月23日～7月6日 県立湘南高（神奈川）

6月30日～7月12日	東北学院高（宮城）
7月1日～7月14日	盛岡白百合学園高（岩手）
7月4日～7月17日	県立修猷館高（福岡）
7月7日～7月19日	川越市立川越第一中（埼玉）
8月25日～9月5日	北星学園女子高（北海道）
8月26日～9月8日	遺愛女子高（北海道）
9月1日～9月13日	県立桐生女子高（群馬），京都市立日吉ヶ丘高（京都）， 広島女学院（広島）
9月3日～9月20日	県立足利高（栃木）
9月6日～9月20日	親和中（兵庫）
9月8日～9月20日	小金井市立東中，保谷市立柳沢中（東京），鹿児島市立 鴨池中（鹿児島），都立国立高（東京）
9月8日～9月22日	道立札幌北高（北海道）
9月11日～9月24日	上福岡市立第二中（埼玉）
9月12日～9月27日	町田市立町田第一中（東京）
9月16日～9月28日	大阪星光学院高（大阪）
9月16日～9月30日	浦和ルーテル学院高（埼玉）
9月26日～10月9日	都立武蔵高（東京）
10月6日～10月18日	三鷹第二中（東京）
10月20日～11月1日	北区立富士見中（東京），柏市立柏第二中（千葉）
11月4日～11月17日	麻布高，城北高（東京）
1月12日～1月24日	修道中（広島）

3. 実習協力校

学校名	教科						計
	社会	理科	数学	英語	宗教		
三鷹 第一中		1		1		2	
三鷹 第二中	2	1		1		4	
三鷹 第五中				2		2	
三鷹 第六中				1		1	
小金井 東中		1				1	
小金井 緑中				1		1	
武蔵野 第二中				2		2	
武蔵野 第三中	1					1	
府中 第五中				1		1	
新宿 東戸山中				1		1	

学校名	教科	社会	理科	数学	英語	宗教	計
文京 第十中					1		1
目黒 第九中					1		1
中野 第五中					1		1
中野 第七中					1		1
杉並 井草中					1		1
北 富士見中			1				1
東村山 第一中					1		1
保谷 柳沢中		1					1
狛江 第二中					1		1
練馬 旭丘中					1		1
町田 第一中		1					1
町田 成瀬台中					1		1
町田 南大谷中					1		1
都立 三田高					1		1
都立 八潮高					1		1
都立 戸山高					1		1
都立 立川高				1	2		3
都立 武蔵高			1				1
都立 国立高				1			1
都立 久留米西高					1		1
新潟 浦川原中					1		1
横浜 松本中					1		1
上野学園					1		1
浦和 大谷場中					1		1
女子学院					1		1
上福岡第二中					1		1
川越 富士見中				1			1
秋田 南中					1		1
西宮 浜脇中					1		1
横浜 南中					1		1
柏 第二中					1		1
大宮 南中		1					1
市川 第五中					1		1
川越 第一中		1					1
富山大 附属中			1				1
北橋中					1		1
鹿児島 柴原中					1		1

学校名	教 科						計
	社会	理科	数学	英語	宗教		
横浜 根岸中				1		1	
鹿児島 鴨池中				1		1	
山梨 御勅使中				1		1	
武生 第三中				1		1	
沼津 片浜中	1					1	
和歌山 紀伊中		1				1	
浦和 三室中		1				1	
香川 引田中				1		1	
熊本 西原中				1		1	
東洋英和女学院中				1		1	
神戸女学院中				1		1	
親和中				1		1	
修道中	1					1	
山梨 日川高				1		1	
調布学園				1		1	
筑波大 附属中				3		3	
東北学院				1		1	
湘南高			1			1	
神奈川 生田高				1		1	
松本深志高				1		1	
福岡女学院				1		1	
聖心女学院				1		1	
郁文館高				1		1	
新潟 高田高				1		1	
桐蔭学園	1					1	
九州女学院				1		1	
明星学園		1				1	
長野 屋代高				1		1	
福島 安積女子高				1		1	
西宮高	1					1	
遺愛女子高				1		1	
盛岡白百合学園高		1				1	
新潟高				1		1	
広島女学院				1		1	
桐生女子高				1		1	
浦和ルーテル学院		1				1	
洲本高	1					1	

学校名	教科	社会	理科	数学	英語	宗教	計
藤沢高		1					1
横須賀高					1		1
麻布学園		1			1		2
大阪教育大附属池田					1		1
" 天王寺					1		1
福岡修猶館高		1					1
フェリス女学院					3		3
頌栄女子学院高					1		1
宇都宮女子高		1					1
宮城学院					1		1
女子聖学院					1		1
足利高					1		1
桐朋女子高					1		1
北星学園女子高					1		1
山手学院			1				1
新潟敬和学園					1		1
京都 日吉ヶ丘高					1		1
巣鴨女子高			1				1
成美女子高		1					1
伊集院高		1					1
札幌北高					1		1
大阪星光学院高			1				1
国際基督教大学高		2	2		4		8
計		20	16	4	87		127

4. 学科別および男女別

学 科	性 別		合 計
	男	女	
人 文 学 科	2	5	7
社 会 学 科	10	8	18
理 学 科	9	9	18
語 学 科	9	43	52
教 育 学 科	8	15	23
教育学研究科	0	1	1
行政学研究科	0	1	1
比較文化研究科	1	2	3
聴 講 生	0	4	4
計	39	88	127

5. 教員免許状取得状況

1981年3月卒業生345名中、教員免許状を取得した学生の詳細は次のとおりである。（聴講生を除く）

教養学部

学 科	免許状取得者実数	中 学 校 教 諭 一級免許状	高 等 学 校 教 諭 二級免許状
人 文 学 科	8	7	8
社 会 学 科	12	12	12
理 学 科	17	15	17
語 学 科	28	22	28
教 育 学 科	11	10	11
計	76	66	76

- 鈴木 克明助手 (非常勤) (視聴覚教育) : 81年4月より着任。
高柳 康雄助手 (非常勤) (視聴覚教育) : 81年4月より着任。
小林 栄智教授 (英語学) : 81年4月。語学科長に就任。
原 一雄教授 (心理学) : 81年4月。一般教育主任に就任。
立川 明講師 (教育学) : 81年4月より助教授に昇任。
清水護客員教授 (英語学) : 81年8月31日退任。
原 喜美教授 (教育社会学) : 81年3月31日退任。

■休職・帰任

- 村木 正武教授 (言語学) : 80年9月, 1年間の休暇より帰任。
山口 俊夫教授 (生物学) : 81年4月, 1年間の休暇より帰任。
ドナルド・C. ウォース教授 (物理学) : 81年4月より82年3月迄休暇。
井上 和子教授 (言語学) : 81年4月より82年3月迄休暇。